

Luncheon Linguistics, 31 October, 2018

2018 (平成 30) 年 10 月 31 日

「ペルシア語のゼロコピュラ: 焦点小辞構文の分析から」

発表者: 大久保 弥 (東京外国語大学大学院博士前期課程), 野元裕樹 (東京外国語大学大学院総合国際学  
研究院准教授)

ペルシア語の直説法現在形コピュラには、独立形と非独立形という形式があり、両者は交換可能とされてきた。本発表では、累加の **ham** や対比の **ke** という接語形式の焦点小辞が顕在的である文では、独立形コピュラは生起できるが、非独立形コピュラは生起できないというコピュラの形式による統語的制限が見られることを指摘した。

この現象について、まず、従来のコピュラ体系を捉え直してゼロ語幹を導入し、接語とされてきた非独立形は、ゼロ語幹と人称接辞から成るとした。非独立形は **vP** 補部の句と音声的に一体化することで人称接辞の拘束的性質が満たされる。しかし、焦点小辞構文では焦点小辞が前接する句は **FocP** 指定部にあり、**vP** 補部に音形を持つ要素が無いことが、非独立形コピュラの生起制限に繋がると分析した。さらに、接語間の相対的順序、選択制限、縮約など他の説明を試みても、この現象に効果的な分析ができないことを明らかにした。

この分析は、無形 (ゼロ語幹) 導入により文法記述のさらなる体系化が可能なこと、焦点小辞の対象句が無標文とは異なる位置を占めること、形態素の音形の有無が文法性を決めうることを示すものである。